

# 介護等体験実習 の報告

## 介護職と教育職の接点

沓掛 勇介

(国際言語・文化学科3年)

私は3年次の夏季に「八風・マーヤの園」という社会福祉施設で、5日間の介護等体験実習を行いました。マーヤの園で体験した出来事はどれも初めてのことばかりで、失敗もありましたが、多くのことを学び、とても貴重な経験になりました。

実習が始まって、私が初めに努めたのは挨拶をしっかりとすることでした。まずは利用者さんの緊張を解いて、気軽に声かけができる関係をつくらうと考えました。慣れない笑顔を振り撒いた甲斐もあって2日目には多くの利用者さんと打ち解けて、軽作業中の声かけや生活学習の支援が行えるようになりました。その一方で、利用者さんの中には、意思の疎通が困難な方や、警戒心が解けず顔を見合わせることもできない方がいて、その場合は簡単な挨拶でもなかなか上手くいきませんでした。そういった利用者さんとの距離の縮め方が分からず、施設の職員さんに相談してみると「広い視野で支援をすることが大事」だとアドバイスを頂きました。それからその助言を機に「広い視野」を意識して、少し利用者さんを観察してみました。するとそれまで見落としていた表情や特徴がよく見えてきて、例えば会話が難しくても元気な利用者さんにはタッチで挨拶をしたり、顔を見合わせるできない利用者さんでも、必ず話は聞いてくれているので、深入りせずに軽く声だけかけてみたり、利用者さん一人一人に合った支援、接し方があることに気づきました。

しかし実習3日目に私は大きな失敗をしました。その利用者さんは気さくで笑顔の絶えない明るい方でしたが、その日の朝は少し様子が違って、私はその変化に気がつかず昨日までと同じ調子で声を

かけました。するとその利用者さんから「何を笑っているんだ」と激しい剣幕で怒鳴られてしまい、私は何が起こったのか状況も呑み込めず、その場をごまかして、急いで職員の方に事情を説明しました。するとどうやらその利用者さんは感情の起伏が激しいところがあるらしく、特に今日は機嫌が悪い日だったということでした。私は昨日までの、知り合ったばかりの利用者さんの表情や特徴だけを捉えて、その日の機嫌であったり調子であったり、そういった些細な日毎の変化に目を向けていなかったことに気がつきました。結局、実習5日目の最終日にもまたその利用者さんを怒らせてしまって、今度は慎重に接して変化も読み取れていたのにどうしてだろうと少し落ち込みました。けれどその後すぐに利用者さんから、どうしても機嫌が悪くなって本意に反して怒鳴ってしまったと事情を聞くことができました。自分の中で納得して整理をつけていたつもりでも、利用者さん自身から気持ちを聞くことで胸のつかえが取れて、支援する側がこんなことで落ち込んでいるようじゃ介護は務まらないと思ひ直すことができました。

いつか教壇に立ったとき、今度は施設の利用者さんでなく、数多くの生徒に接することになります。一人ひとりに合った接し方や些細な様子の変化に気がつけるというのは、介護に携わる者にだけでなく教師にも必ず必要になるスキルです。今回実習で学んだことは決して忘れず、将来生かせるよう心に刻んでおこうと思います。

---

## 介護等体験実習（特別支援学校）を終えて

三山 莉絵子  
(人間関係学科3年)

---

今回の実習では、生徒の気持ちを理解することと積極的にコミュニケーションをとることを目標とした。実習では、生徒と工作をしたり、ダンスの練習を行ったり、卒業生の講話に参加した。

実習では、特別支援学校での教師の仕事の大変さや生徒を理解すること、生徒に接することの難しさを学んだ。

何らかの障害をもつ生徒たちが通う特別支援学校では、各教室に2、3名の教師がいた。また、医療的処置が必要な生徒や目が離せない生徒もいた。初めは教師の人数の多さに驚いていたが、それでも足りていない理由は実習を通して理解することができた。生徒によって教師の指示を理解できる力は異なるし、急に感情が大きく変化して動きまわってしまう生徒もいる。生徒一人ひとりに対して、教師が一人つくという体制が理想ではないかと感じたが、このような体制を整えていくことはかなり難しいのが現実である。そんな大変な状況のなかでも生徒が安心して学校生活を送れているのは、教師が生徒のことをしっかり理解しているからだと思った。

生徒はどんなことにどのくらいの時間集中できるのか、どの程度の作業であれば可能なのか、どんなときに感情が乱れてしまうのかなど、教師は生徒の特徴を把握していた。そして、生徒に応じて話すスピードや指示の出し方、接し方など対応を変えていきながら、授業を行っていた。これは、生徒のことを理解しているからこそできることであり、効率よく授業を進めることができているのだと思った。

また、生徒とコミュニケーションをとったり、関わっていくなかで、生徒が何を考え、何を伝えようとしているのか正直わからないことがあった。急に飛び跳ねたり、教室から出て行ったり、自分の体を

叩いたりするなどの行為に対して、どんな意味があるのか理解することができなかった。これらの行為は、本人にしかわからないことであって、生徒の言動の意味を予測することしかできない。しかし、「わからない」で終わるのではなく、理解しようとする必要があることではないかと思った。そして、理解しようとしていることは生徒にも伝わると思う。実習中に理解できないと思ったいくつかの行為は、生徒が一生懸命伝えようとしているメッセージかもしれない。言葉では伝えることができなかったり、うまく表現できない生徒もいるからこそ、それらを読み取ろうとする努力はしなければいけないと思った。

実習を経験したことで、障害をもつ生徒に対するイメージが変わった。話しかけても返してくれないのではないかと、伝えたいことは伝わるのだろうかという不安があったが、実際は一生懸命答えようとしてくれる生徒が多かった。言葉で伝えることができない生徒は表情や身体を使って表現してくれた。貴重な体験をすることができた2日間の実習となった。